



Title	私の感想
Author(s)	山本, 檣信
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 116-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88778
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

私の感想

山 本 楯 信

私が初めて懷徳堂へよせてもらつたときは、松山先生の禮記纂言抄の講義があつたときのこと、當時月曜と木曜と隔週土曜の講義があつたのみであつた。土曜の講義が毎週にある。日曜の朝講がふねる。水曜の特科講義、金曜の文科講義、或は通俗講演と事業はすん／＼進捗した。永年、先生の御希望だつた圖書館が出来て故西村先生の御藏書をはじめ數万の貴重な書籍を藏するに至る。十周年の記念式もあける。この間、創建の恩人、西村先生の逝去といふ打撃は受けたが理事長永田翁の一方ならぬ後援ありて事業はどん／＼拍子にすすんだのに、好事魔多しとか、懷徳堂にとつて今年はなんといふ不幸なめぐりあわせか、永田翁を失ひて涙のかわかぬに、いままた松山先生の逝去

に遭遇して、悲しみの極み、いふべき言葉を知らない。

紋付、袴、それは第一に思ひ出される松山先生の謹嚴なお姿である。日頃召されし黒の紋付に思ひ出の数々をつゝみて、常緑の櫛にうづもる、白衣の御遺骸、生けるが如きお顔に、涙ながら最後のお別れをしたあの夜の悲しかりしことよ。二月二十三日、水曜日、小講堂で、理學宗傳卷之十七蔡仲默の書經序を講じ終りて、身体の具合が悪いので少し時間は早いがこれでやめると仰せられて歸つて行かれたのが最後にならうとは夢にも思はなかつた。殆ど一日とて休まれたことなく、いつも見受ける先生の温顔を見失つて懷徳堂には淋しい日がながくつゝいた。

御全快を待ちに待った。神に佛に御全快を祈願した。一時御危篤のよし承ったが、その後追々およろしきよし聞きよろこび居りしに、御病源明瞭を缺き不安の裡にいたすに時を過ごし、ついに悲しき結果とはなつた。四月二十二日、御病危篤ときゝ鳥潟病院にかけつけたが、少康とのことになんぞ安心して歸宅したのであるが、翌二十三日の夜、濱田先生の支那古銅器の銅色についての講演中であつた。電話のベルの音が聞えた。はつと思つた。自動車の音が聞える。果して松山先生が七時四十分になくなられたのであつた。病院へかけつけ病室へまわりお悔み申しあげて堂へ引返し、再び病院へかけつけたときは擔架が出てしまつたところであつた。

琴瑟相和

聞懷德堂學子山本子信之新婚書贈以爲祝

大正乙丑仲冬

春城 松山直

と書きて賜はりし額を仰ぎ見ては、何かにつけ懇切に御指導賜りし在りし日の先生を思ひ出しては涙ぐむのである。三十幾つといふお書きつぶし

が出て來た。先生の實意溢るゝ、大事なおかたみであるぞと一友人より聞かされて、一入先生をしのびまつる次第である。

若くして死んだ高砂兄がゐたころのことである。中川兄と三人つれだつて松屋町を散歩するのを常としてゐたのを、なんか特に研究でもしてゐるのかと尋ねられた謹直な先生である。電車に飛び乗りせられるのを見たどて、奇蹟でも發見したやうに噂した先生に逸話と云ふものが少いのも道理である。それは先生が少しの缺點も見出せない完全な人格者であつた所以であると私は思ふのである。

永田翁に就ては多くのことを知らない。毎朝、大濱の潮湯に出かけられて、やあと誰彼の差別なく愛嬌をふりまかれると聞いてゐた翁は、懷德堂へみえても、毎度お世話さま、お蔭で結構ぢやと、我が店の繁昌をでも喜ぶやうに欣然として挨拶せられたものである。懷德堂に對する翁の盡力は並大抵のものでなかつた。しかもそれはよくある例の、金持の道樂でもなければ、

世間の見榮を張るためでもない。誠心誠意、斯道のために盡瘁されたのである。人力車でやつてみて、二階の書記室の偶で聴講生の出席簿を展げて見てゐられるのを見受けたことがある。ただ通り一べんのものでなかつたことがわかる。拜金の臭味強ければ又一方こうしたことも強くなるものだ。永田翁をはぐみ育てた浪華の土地である。翁の後繼者を生み出すに相違ないと一友人は斷言するが、力をつくして斯文のためにつくされる翁のやうな圓滿な人格者を再び獲ることは至難である。惜しい人をなくしたものだと思ふが、翁自身にしてみれば、功とげ名をあらはして倒れられたのである。男子の本懐である、めでたき往生であるともいひ得られる。翁の晩年の生活が原因する過勞から死を早められたとも聞き及んでゐるので、さびしい人生の運命といふものを考へて一方氣の毒に堪へない次第ではあるが。妙な引きあひを出

すと思ふ人も少くないと思ふが、幸運なりし一生の最後を悲慘に果てし今西林三郎氏の死をみて、種々難多な事業に關係してゐられる翁が今西氏のやうなことになるはせぬかと杞憂してゐた私は、翁の死をめでたき往生だと思ふのである。いつなんどき、どんな幸福の神が舞ひ込んで來やうとも知れず、また、どんな不幸の嵐がふきすさばうとも知れない。廣く大きく生きて居る波瀾に富む人に於て殊に然りである。人の一生の不幸は棺を蔽ふの後でなければ知ることには出來ないのである。それ自身の價値に何のかわりもないのではあるが、百年千年の後、その人の名譽を支配する力は案外大なるものがある。贅六の生粹、大阪町人の典型として、大阪の町人とはこんなものでござると大世界に自慢するに足る無瑕の翁を獲たことがうれしいといふのが翁の死に對する私の感想のすべてなのである。